
光

スグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光

【著者名】

スグル

【ISBN】

N8612A

【あらすじ】

その後の彼を知るものは居ない。

・・・・・・・・・・・・・・

朝の日差しが差し込む夏の森林。

ここは、東北地方の古い山道の道路。

過疎化が進んで、今では、誰も通らない。

標識は錆びている。

しかも、その先に小汚くて、誰も通らないトンネルがあった。

「待て、こら……！」

「待てるか！…」

そもそもって、今、阿部健七というチンピラが、ヤクザに追いかけられている。

そして、息を切らして逃げてる。

彼は中学時代、陸上部で良かつたと思つていた。

とりあえず、追いかけられてる理由は語ると、長くなる。。。

無職のせいで、ギャンブルに手を出し、ついには借金までした。更には、通りのキャバクラのツケも返せないくらいに膨れ上がり、それで、痺れを切らしたヤクザが襲つて来ている。。。

彼の人生のテーマは、「なんとか、なるわ」

そんなんだから、こんな様に。。。

ヤクザは、アパートの前で待ち伏せしてた。
おかげで、不気味な道路に走つていた。

「あそこへ、いやがつた！！阿部！！！」

「やばい！！」

穴があつたら、入りたい一心で目の前に逃げ込んだ。

そうして、健七は迷わずトンネルに入っていた。
薄気味悪くて、真っ暗だった。

あと、冷気がきた。

「逃げ切れた！！」

しばらく走りこんだ健七は、そう言った。

健七は、逃げ切ったと喜んでいた。

「やっぱ、人生ってなんとなるぜ！！」

そう心から思っていた。

だが、トンネルの出口が見えれば、見えるほど、変な雑音が聞こえた。

「なんだ・・」

彼は走るを止めてみた。。。

だが、なにも聞こえなくなつた。

「・・・」

急に、風の音がした。

妙に生ぬるい気持ちの悪い風であつた。

シユツ！

「痛つ！！」

急に健七は、左の首筋を押さえた。

斬られたような激痛が走つた。

血が出ている。

空気圧で生じる、かまいたちか？

傷口に触れた左手を見ると、血がべつとりだった。

「なんなんだよ！！」

着ていたTシャツにも血がついた。

もう一度、左の首筋に触れた。

「えつ・・・！」

傷が、塞がっていた。

血も流れていな。

痛くも無い。

「・・・」

傷が浅かつたのか・・?

もう血が手につかなくなつた。

「うおっ！」

光が、目に入った。

トンネルの出口が見える。

そして、健七は、そのまま出口に向かつて走つて行つた。

だが、彼は気づいていなかつた。

血が出ていた首筋に、変な痣が出来ていたのに。

・・・・・・・・・・・・

「大丈夫か、君？」

「つ！－！」

健七は、いつの間にか、仰向けに倒れていた。

目の前には、警官がいた。

気絶していたようだ。

「・・・」

上体を起こして、左右見てみた。

追いかけてきたヤクザが、同じく気絶していた。

警官は、自転車に乗つていて一人だけ。

しかも、トンネルの出口に出たと思ったら、入つて行つたトンネルの入り口に居た。

間違いはない。

トンネルの出口と入り口が同じつてことはないし、田舎らしき物もあつた。

「さつや、この近くを通つた住民から、人が倒れてると連絡があつて……」

と、警官から事情を聞いた。

なんで、トンネルの入り口に戻つた……。

そのことが、気になつて警官の説明が頭に入らなかつた。

このあと、ヤクザからドサクサに紛れて逃げることが出来た。

だが、今ひとつ、スッキリしないでいた。

・・・・・・・・・・・・・

「はあー」

アパートの部屋に着いた健七は、ため息をついた。

そして、ベッドに倒れこんだ。

逃げ回つて疲れたのと、借金をどうやって返して行くかであつた。

そう考へると、ため息が尽きない。

時間は、正午になつたばかりだつたが、走つたせいで疲れて眠かつた。

ピンポーン！

プッシュホーンが鳴つた。

だが、健七は無視。

どうせ、今日の朝のように、また借金取りである。ドアの鍵は閉めているので、居留守を使つていた。別に借金取りでなくとも、健七は、誰とも会いたくなかった。だが、何度も何度もプッシュホーンを押していた。

「うるせえな・・・俺は、居ないから帰れよ・・・」

と小声で愚痴つた。

それでも、しつこく鳴っていた。

随分、今日は、ヤクザに縁があるなと思つていた。

ブッシュホーンが鳴り止んだ。

そして、急に静かになった。

「居なくなつたのか・・・？」

と思って、健七はドアノブに這う様に近づいて行つた。

まるで、ゴキブリのような動きであつた。

よく事情があつて、この這うような動きは、よくやつっていたのであつた。

音を出さないようだ。

そして、静かに鍵穴に目を近づけた。

こうすると、ドアの向こうの景色が見える。

「・・・！」

ドアの向こうには、男が一人立つてゐる。

一人は、長身のロング。

もう一人は、アロハのサングラス。

というか、今日、健七を追いかけてきたヤクザの一人であつた。

「またかよ・・

と、健七はため息をついた。

しかし、ドアノブに立つてゐるヤクザ一人の様子がおかしかつた。どこか、小刻みに震えていた。

また健七は這う様に動いた。

誰だか解つたのだから、ドアノブに居る必要はない。

あと、この二人が消えるのを祈つてゐるだけ。
そして、またベッドに着いた。

「バン！！！」

急に大きな音がした。

「なんだ！」

ドアが、内側に倒れた。

外から蹴られて壊されたのだ。

ヤクザがキレて、ドアを蹴り倒したのか。

と思いつつ、健七は逃げ出そうと、窓側に走った。

それにもしても、一言も発さないヤクザが不気味に感じていた。

「・・・」

「・・・」

ヤクザ一人は、無言でアパートの中に入っていた。

どこか、まるでロボットのように、ただ歩いているだけであった。

そして、二人は窓の方に眼を向けた。

窓が開いている。

この部屋は、一階なので窓から出ても怪我などしない。

だから、健七は逃げられた。

・・・・・・・・・・・・

「ボン！！」

アパートの住民の青年が、原付のエンジンを始動させた。

これで、バイトに向かうはずであった。

「おい、借りるぞ！！」

と言つて窓から出て行つた健七が、勝手に青年の体を払い除けて、バイクにまたがつた。

「おい、こらー！これから、バイトなんだよーー！」

「あとで、返す！！」

と、言い放ちつつ健七はアクセルを握った。すると、タイヤが回転しはじめる。

バイクは、もう持ち主の体から離れた。

「おい――！！！」

青年は叫んだが、健七は構わず、バイクを走らせた。さすがに、これならヤクザから逃げられる。

・・・・・・・・・・・・・・

バイクは、一層、加速した。

原付ではあるが、法定速度を無視してアクセルを握った。見渡せば、景色は田舎らしく田んぼだらけである。

この道は、朝、健七が走った道。

もつ、このぐらいなら逃げ切つただろう振り返った。

「・・・」

足音が聞こえる。

走っているような足音。

道路を足で叩いているような音。

「嘘だろ・・・」

目を疑つた。

バイクについて行けるはずがない。

じゃあ、何故だ・・・。

健七は、目を疑つた。

ヤクザ一人が、後ろから走つてついて来ている。

しかも、息を切らさずに走っている。

なんで、バイクに・・・。

ブロオオオオ——ン！——！

健七は、アクセルを全開にしてバイクを走らせた。
不気味だつた。

バイクに、走つてついてくるヤクザ一人が。
しかも、息を切らしていない。

無表情で。

なんだと、疑問に思いつつも逃げた。
別の恐怖が、健七には沸いて来た。

バイクは、60キロは出ていた。

なのに、後ろに二人はミラーに映つている。
しかも、目の前には、朝、通つたトンネルが見えてきた。
別に、この方向に向かっていたわけでもなかつたのに。
だが、今は、そのようなことを気にしている場合ではなかつた。

「うおおおおお——！」

段々、ヤクザが迫つてきた。

こつちはバイクで走つていると言つの——。

氣のせいか、バイクが遅く感じる。

健七は、バイクのメーカーを見て血の氣が引いた。
ガソリンが尽きかけていたのだ。

アクセルを捻つても、もうバイクは加速しない。

キキイ——！

「くそ——！」

ついには、バイクを健七は乗り捨てた。
そして、自らの足で逃げ始めた。

「バサツ！バサツ！！」

羽根が羽ばたく音がした。
近くに鳥でもいるのか?
そういえば、足音が聞こえない。
健七は、振り返った。

「・・・！」

嘘だろ・・・。
夢だ・・。
こんなこと、ありえない・・。
頭があかしくなりそうだった。

バイクを追いかけてくる時点で、おかしかった。
そして、仕舞いには、健七の田に映つてゐる状況となつた。

「飛んでる・・」

ヤクザ一人は、空中に飛んでいた。
二人して背中に、コウモリのような翼が生えている。
まるで、悪魔のように。

そして、羽根を羽ばたかせ健七に迫つてくる。

「うわああああああ――――――――――」

健七は、必死で走つた。

もはや、なんで逃げてるのかも、ビビりでも良かつた。
自分の命の保証が無い。

それだけは、確かであつた。

「ぐおおおお・・」
「ぐおおおお・・」

と、ヤクザは雄叫びを擧げる。

もはや、背中の羽根といい、顔つきまで悪魔のようになつてゐる。

一人の手は、鋭く爪が生え始めた。

まるで、肉食獣のような手に。

特撮のように、二人のヤクザの肉体が変化し始めた。

健七は、そのことに怯えた。

もはや、後ろからでも、一人が人間ではなくなつてゐるのに解つてゐる。

だからこそ、走った。

なぜ、こんな異常な事態になつたのか。
考へてる余裕もなかつた。

目の前には、例のトンネルが見えた。

そこに向かつて、走るしかない。

逃げる場所を選択する余地もなかつた。

「畜生！――！」

そう言葉を吐いた。

あのトンネルが、原因なのか。

ヤクザ一人を変えたのは。

翼が生えて、肉食獣みたいにヨダレを垂らしてやがる。

人間じやない。

そいつが、後ろから襲つてくる。

「だあああああああ――！」

健七は腹の底から、恐怖で支配されそつだつた。

だから、思い切り叫んだ。

そして、自分の体がまたトンネルに入った。

「ぐおおお・・

まだ聞こえてくる。
よだれを垂らしている。

トンネルの中は、真っ暗だ。

そんな状況で、後ろに引っ付いてくる化け物から逃げている。
走つても、走つても、恐怖が消えない。
健七は首筋から、生暖かい物を感じた。

「いでえ・・

走りながら、左首筋を触った。

血がべつとりだ。

なんで、また血が。
そんなことよりも、後ろの化け物が・・。

急に、光が見えた。
トンネルの先から。
もうすぐ出られる。
だが、後ろには・・。
どうしようもない絶望が、健七を襲つた。
徐々に、光は増してゆく。

「眩しい・・

太陽の光ではない。
なんか、光の感じが違う。
ライトの光でもない。
自然の光でも人工的な光ではないと、健七は思った。

その光に、健七は照らされた。

気のせいか、恐怖が消えてゆく。

「なんだよ、この光の感じ・・・」

眩しいけど、心地よかつた。

不思議な光である。

そのせいで、走るのをやめた。

うしろからは、化け物が迫っている。

しかし・・・。

「ぎゃああああ！－！－！」

「うああああああ－！－！」

後ろの化け物が騒ぎ始めた。

肉食獣のような叫びだが、苦しんでいる。

やつらも、光に包み込まれてる。

そのせいか、苦しんでいるのは。

健七は、振り返ってみた。

化け物が近づいてこない。

奴らの翼が縮んでる。

爪が短くなっている。

徐々に、姿に人間に戻っている。

光を浴びたせいか。

そして、化け物の動きが止まつた。

人間に戻っている。

異形の姿だったのに、服装までもが元に戻っていた。

そして、二人のヤクザは氣絶して倒れこんでいる。

「はあはあ・・・

いつのまにか、光は消えている。

そして、呼吸が激しく乱れている。

頭が、まだ錯乱している。

だが、助かつたようだ。

それは、解る。

健七は、汗で濡れた手で首筋を触った。
血は出ていない。

「なんだって・・・、言うんだよ・・・」

そして、首筋に触れた自分の左手を見た。

「！？」

左手が、異常だ。

ゴツゴツした手で、自分の手ではないようだ。
爪が虎のようになっている。

まるで、金剛力士像の手のよう。

右手は、普通だ。

左手だけが、変化している。

「なんなんだよ！？！」

その左手を見つめ続けながら、トンネルの中で腰をついた。
足が震えている。

もしかして、自分もこのヤクザのような化け物に・・・。

そう考えると、健七の意識が擦れて来た。

トンネルの暗闇が、また増してきた。

その暗闇に飲み込まれてゆくように、健七の視界は消えた。
意識も無くなっていた。

より暗闇は、健七を飲み込んでゆく。

夜になり、その暗闇は辺りに肥大化してゆく。

その後の阿部健七を知るものは居ない。

知っているのは、あのトンネルの暗闇だけであった。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

(後書き)

初の短編です。
読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8612a/>

光

2011年10月3日08時20分発行